

第 29 回目 新しい人を身に着る

はじめに

● 前回は、「キリストのからだ」にたとえられた教会が、愛のうちに成長していくことについてお話ししました。特に、からだの中における関節の果たす役割についてお話ししました。関節の最も大切な働きは「結び・結び合わす」ことです。からだは多くの部分からなっており、それらを結び合わすことがなければ全体がばらばらです。結び合わせ、組み合わせていく関節の働きを、別のことばで言うならば、人間というものを理解する能力を持ち、しかも愛をもってかかわることです。このこと自体はとても重要な事柄なのですが、全体の話の流れとしては脱線した部分なのです。

●パウロの話の特徴はよく脱線することです。脱線するということは話の流れ、本筋が見えなくなってしまいかねないということです。私たちは話をしているうちに、次第に脱線してしまい、話の本筋が見えなくなってしまうことが多いのですが、パウロは違います。必ず、脱線する前のところに戻って、話を続けていく人だということです。具体的にどこから脱線し、どこへ戻ったのでしょうか。4章1節でパウロはこう言いました。「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」と。4章17節と比較するならば、積極的・肯定的な勧告です。その召しの内容を以下2~3節に記しています。「2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保つ」ことです。ここから脱線が始まります。つまり、「御霊の一致を熱心に保ちなさい」と言ったことばから、「御霊の一致」がどういうものか、その目的(目標)はなにかということについての話に展開し、「一致と多様性、および成長」という話が4節から16節にまで及んでいるのです。脱線した話だから大切ではないということではありません。むしろ、パウロの脱線はきわめて重要な話に及ぶことが多いのです。

●脱線してもパウロの話は必ず本筋に戻ってきます。つまり、4章1節でパウロがエペソの聖徒たちに「私はあなたがたに勧めます」と言った「勧告」に話が戻ってくるのです。4章1節でパウロは「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。」と言いましたが、4章17節でも同じく勧告があります。

1. パウロの二つの勧告

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 4章1節

さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 4章17節

そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。

●1節と異なる点は、1節では単に「さて、・・・私はあなたがたに勧めます」と言っているだけですが、17節で

は「**そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。**」となっています。ニュアンスの違いは「おごそかに」という点です。実は、「勧めます」と訳された動詞はギリシア語原文では異なっています。1 節の「勧めます」は「パラカレオー」(παρκαλέω)という動詞で、17 節の「勧めます」は「マルテュロマイ」(μαρτύρομαι)という動詞が使われています。後者の「マルテュロマイ」は「断言する」という意味で、それが「おごそかに勧告する」というふうに使われているようです。

●4 章 1 節の「パラカレオー」(παρκαλέω)は、「傍らで説き勧め、懇願・嘆願する、慰める、励ます、力づける、指図する、教える」といった意味があります。エペソ書と似たような構造を持つローマ書にも実践の部分である 12 章以降の冒頭には、「そういうわけですから、兄弟たち、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします(「パラカレオー」(παρκαλέω))。となっています。エペソ 4 章 17 節の「マルテュロマイ」(μαρτύρομαι)は「神を証人として呼び、断言する、おごそかに勧める」という意味があります。1 節のニュアンスと比べてより強い表現で「言わせてもらいます」といった勧告なのです。おそらく、その内容とすることが肯定的なものではなく、「もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。」という消極的・否定的な内容のゆえではないかと思われる。

●つまり、パウロは異邦人と神の民の歩みを明確に「区別する」ことを求めています。神の創造において、神は「光と闇」「昼と夜」を区別されることをよしとされました。この「区別する」ことにおいては、基本的に、パウロはいつも厳しい態度を取るようです。

【新改訳改訂第 3 版】Ⅱコリント書 6 章 13~16 節

13 私は自分の子どもに対するように言います。それに報いて、あなたがたのほうでも心を広くしてください。

14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。

16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。

●使徒パウロの手紙の特徴は、前半には神が私たちのために何をなして下さったかを記している部分(教理)と、それに基づく具体的な歩みを記した実践、この二つの部分から成っています。そして実践の部分では、こうすべきであるといった命令ではなく、「勧めます」という勧告の形で述べられているのです。きわめて重要な事柄であっても、決して強制的ではなく、私たちの自発性が促されているのです。この「自発性」ということはとても重要です。それはみずから責任をもって神に応答する自由と尊厳のしるしだからです。

●4 章 1 節にある勧告と 17 節の勧告はワン・セットです。前者は積極的・肯定的な表現であったのに対し、17 節の方は、消極的・否定的表現がなされています。ところで、「**むなしい心で歩んではなりません。**」とはどういうことでしょうか。

パウロの勧告	
(1) 積極的・肯定的勧め	召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。
(2) 消極的・否定的勧め	もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。

# אגרת שאול אל האפסים

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 4章 18～19節

18 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。

19 道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行いをむさぼるようになっています。

●それは「神のいのちから遠く離れている」状態で生きることを意味します。そこには、以下の「二つの事実」があります。それは「無知とかたくなな心」です。その結果が 19 節のかたちとなって現われてきます。

- ①「無知」・・・神についての無知です。
- ②「かたくなな心」・・・神を知ることを拒もうとする心が存在します。

●私たちはキリストにあって、新しく生まれ、神のいのちにあずかったわけですから、神を知ることができますし、ますます神を知りたいという願いを持つようになっていきますが、神のいのちから遠く離れている者には、神を知りたくも、神を知りたいという願いもなく、むしろ神を知る事を拒絶する心があります。神のいのちにあずかった者が、神がどんなお方かを知らずにも何とも思わないような歩みをすべきではないというのが、パウロの言わんとするところです。換言するならば、神を知る者とされたわけですから、もっともっと神を深く知り、神を愛し、ますますそのような生き方をしなさいと言っているのです。

## 2. 古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着る

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 4章 20～24節

20 しかし、あなたがたはキリストを、このようには学びませんでした。

21 ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞き、キリストにあって教えられているのならばです。

まさしく真理はイエスにあるのですから。

22 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く 古い人を脱ぎ捨てる べきこと、

23 またあなたがたが心の霊において新しくされ、

24 真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。

●20～24節で、「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着る」(22, 24節)ということに注目したいと思います。このことを理解するために、ローマ人への手紙の12章を援用することにしましょう。2節を見ると、「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」とあります。ひとつの事柄が、必ず、消極的な面からと積極的な面から表現されています。これはヘブル的パラレリズムの修辞法です。

●このみことばをもっとわかりやすく並べ替えてみるとこうなります。

この世と調子を合わせてはいけません(消極的表現)。いや、むしろ、心の一新によって自分を変えなさい(積極的表現)。(そうすれば)神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのか

をわきまえ知ることができるでしょう。「この世と調子を合わせてはいけません」とはどういう意味でしょうか。いろいろな聖書の訳を見てみましょう。

- (1) 新共同訳「この世に倣ってはなりません。」
- (2) 口語訳「この世と妥協してはならない。」
- (3) リビング・バイブル訳「世間の人々の生活態度や習慣をまねてはいけません。」
- (4) 柳生訳「この世の習わしに従うことなく、」

●この世のならわし、価値観、風潮、流行、流れに流されてはならないということです。そのためには、「心の一新によって自分を変えなさい」ということが促されています。このことが私たちの内に起こらなければ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知ることができないのです。この「心の一新によって自分を変える」ということはどういうことでしょうか。エペソのへの手紙4章のことばで換言すると、「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着る」(22, 24節)となるのです。

### 3. イエス・キリストのように生きる

●そのための模範はイエス・キリストのほかにはおりません。

#### (1) 「キリストのように」生きること

- 「キリストのように」生きるとは・・・
- ① キリストが神(御父)を信頼したように、神を信頼すること。
- ② キリストが神(御父)を愛し、人を愛されたように、愛のうちを歩むこと
- ③ キリストが真理の光であったように、光の子どもらしく生きること。

#### (2) 「キリストの心」を心とすること

●神のご計画は、人に「新しい心」を与えることです。つまり、神はあなたが第二のアダムである「イエシュアのように」なることを願っておられるということ。イエシュアのような心を持つことを望んでおられるということです。神は私たちのありのままを愛しておられますが、だからといって、ずっとそのままにはおけません。神は私たちがイエシュアのようになってほしいと願っておられるのです。

●人間の愛は、すばらしい成果を上げると強まり、失敗とともに衰えます。しかし神の愛はそうではありません。神が愛しておられるのは、今のままのあなたです。たとえ、私たちが神を拒絶しても、無視しても、馬鹿にしても、従わなくても、神の愛は変わりません。また、私たちの行いの善し悪しで神の愛を強めたり、弱めたりすることもできません。私たちが失敗や過ちを犯したからといって神の愛が閉ざされることもないのです。逆に成功したからといって神の愛が増すわけでもありません。神はありのままの私(あなた)を愛しておられます。けれども神はあなたをそのままにはおかれません。私たちがイエシュアのようになることを望んでおられるのです。「御子の姿に似たものにしよう」とあらかじめ決めておられるのです。それゆえ、「わたしって心配性なのよね。生まれつき。」  
「俺はずっと根暗のままさ。そういう性分なんだよ。」

## אגרת שאול אל האפסים

「私は癩癩もちで、すぐにかっとなるのを、自分でもどうしようもないんです」  
と言ったことばを決して口にしないようにしなければなりません。なぜなら、神はあなたが、イエシュアのようになってほしいと願っておられるし、神の子どもとなる前から、あらかじめ、御子のようになることを、御子と同じ心を持つことを定めておられたし、また、そのようにしようとしてくださっているからです。とはいえ、私たちの心はイエシュアの心となんと大きく隔たっていることでしょうか。

●イエスの公生涯における最初の頃の説教が記されています。それによれば、「わたしの上に主の御霊がおられる。主(神)が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから・・・」これはイザヤ書の引用ですが、自分に当てはめて語られたのです。最初の説教の記録の前にも、イエシュアは御霊に導かれ、御霊に満たされ、御霊の力を帯びておられました。そして主は、「わたしが父におり、父がわたしのうちにおられる」と言われました。イエシュアは御霊によって御父との親しいかかわりの中にいつもおられたのです。それゆえ、イエシュアは「父がなさることは何でも、子も同様に行動のです。」(ヨハネ 5:19)。「わたしは、自分からは何事も行うことができません。」と言われました。イエシュアの心は御父の心でした。

●私たちも、イエシュアを自分の救い主として心に迎え入れた時に、御霊(聖霊)という方も同時に心の中に迎え入れているのです。この御霊の助けによって、あなたを(私を)、「栄光から栄光へと、主と同じ姿に変え」ようとしてくださっていることを信じましょう(Ⅱコリント 3:18)。

●こんな話があります。20 世紀初頭、アイルランドという国に住む女性の話です。彼女は浜辺の小さな家に住んでいました。すごくお金持ちなのに、すごくつつましくて、爪に灯をともしような暮らしをしていました。その彼女がだれよりも早く電気を家に引いたので、まわりの人々は誰もが驚きました。ところが、電気を引いて数週間後、電気の検針員がその家に来て、戸口に立ってこう言いました。「電気は問題なく来ていますか？」  
彼女は「ええ、なんの問題もありませんよ。大丈夫です。」と答えました。すると検針員がげんそうな顔をして、「お宅のメーターを見ると、使用料がほとんどゼロなんです。本当に、電気、使っておられますか。」「もちろんよ」と彼女はこたえました。そしてこう言いました。「毎晩、陽が沈むと電気をつけるのよ。蠟燭に火を灯すまでつけて、火がついたら、すぐに切るの」

●彼女は電気を家に引いたものの、その電気の恩恵をほとんど受けていませんでした。蠟燭に火を灯すまでのわずかな時間だけ使っていたのです。電気をひくことによって新しい生活が始まるどころか、以前とほとんどなら変わらない生活を彼女はしていたのです。・・・この話は、笑い話ですが、実は、私たちはイエシュアを信じたことによって、神とのライフラインがつながっているにも関わらず、そのわずかしが使っていないのかもしれない。そのために、新しい人を真に生きることができていないのかもしれない。神は「心を一新して」「キリストのように生きたい」と願う者を喜んで下さいます。そしてその力を十分すぎるほどに与えて下さっていることを、心に留めたいと思います。